

審査結果の要旨

(1) 研究の目的に意義や独創性があるか。

全国の高校3年生に対して実施された「英語力調査」の結果によると、英語を「書く力」が際立って弱いことが判明し、英語ライティング指導の重視と改善が望まれている。そしてライティング指導に関しては、評価の研究が立ち遅れている。

従前の英語ライティングの指導・評価に関する研究では、中・上級者レベルという比較的英語力の高い学習者に焦点が当てられてきた。そのため、スローラーナーあるいは初級レベル学習者が書いた英作文を適切に評価する評価基準は存在しなかった。それに対して馬場氏は、一貫してスローラーナーを対象とした英語ライティングの評価について研究を行い、また、英語教員があまり時間をかけずに高い精度で採点でき、信頼性・妥当性・実用性を備えた評価基準を具体的に示したことは教育上、意義深く独創性に富む。

(2) 研究の方法は当該学問分野において妥当なものか。

本研究は、5件の研究から成り立つ(研究1～研究5)。研究1では、全体的評価として広く知られている TOEFL Writing Scoring Guide を用いて評価しうる英作文を書く学習者は TOEIC Bridge ではどのくらいのスコアを得るのかを検証した。検証は8名の研究者が200編の英作文を採点して行った。

研究2では、研究1で検証した TOEFL Writing Scoring Guide を参考にして、スローラーナー向けの試作版・評価基準を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。検証は12名の採点者が30編の英作文を採点して行った。

研究3では、学習者が書く word count (総語数) は英作文のテーマによって変化することが判明したことから、総語数を評価項目として入れることが妥当かどうかを検討するため、timed writing を用いて作業開始後の経過時間と総語数の連関を調査し、総語数の尺度の有効性について検証した。データ収集には147名の大学生が参加した。その結果、総語数がスローラーナーにとっては有効な尺度ではないことを確認した。

研究4では、研究3の検証結果を踏まえ、総語数を評価項目に含めないこととし、スローラーナーの英作文の特徴を考慮し、内容(読み手を引き付けるか、詳細が書かれているか等)、文法、語彙(語彙選択やスペリング)のみを評価基準尺度として取り入れ、改訂版・評価基準を作成し、信頼性と妥当性を調査した。調査は、大学生100名の英作文と TOEIC Bridge スコアを収集して、12名の英語教師が英作文を採点して行った。

研究5では、改訂版・評価基準の信頼性と妥当性を検証するために、既存の分析的評価基準(ESL Composition Profile)の中の内容、文法、語彙に関する事項と、改訂版・評価基準の双方を用いて、スローラーナーの英作文を評価した。検証は、大学生30名の英作文と TOEIC Bridge スコアを用いて、6名の採点者が英作文を採点して行った。その結果、今回作成された評価基準は信頼性も妥当性も高く、スローラーナーの英作文の評価基準として適していることが明らかになった。

以上の手続きは、英語教育のライティング研究の手順として妥当なものである。

(3) 研究資料やデータの収集と分析が適切になされているか。

研究1では、TOEIC Writing Scoring Guide で評価を行った場合の採点可能な閾値を算出するため、英作文評価の平均値と TOEIC Bridge スコアの相関を算出した。また散布図から、TOEIC Writing Scoring Guide で評価を行った場合の採点可能な閾値を算出した。

研究2では、スローラーナー用の試作版・全体的評価基準を作成した。その信頼性、妥当性を見るため、英作文評価の平均値、TOEIC Bridge スコア、英作文の総語数の相関、説明率、散布図を求めた。

研究3では、スローラーナーにおける英作文の量と英語力の関係を検証するため、5分、10分、15分、20分ごとに書いた英作文の分量を、2回調査した。結果は、繰り返しのある一元配置分散分析およびt検定を行い、さらに分布表を作成して検証し、word count を評価基準に含めるかどうかを検討した。

研究4では試作版・評価基準の改訂版を作成し、その信頼性と妥当性を検証した。検証は学習者の英作文の評価と TOEIC Bridge スコアの相関を求め、また一般化可能性理論を用いて、分散成分を算出した。また一般化可能性係数を算出して、信頼性を保つために必要な評定者数をシミュレーションするために決定研究を行った。

研究5では、改訂版・評価基準の信頼性と妥当性を確認するため、分析的評価基準として定評のある ESL Composition Profile と、改訂版・評価基準を用いて英作文を評価した。そして採点者間信頼性、評価の相関を求め、一般化可能性理論を用いて、分散成分を算出し、また一般化可能性係数を算出して、信頼性を保つために必要な評定者数をシミュレーションするために決定研究を行った。

理論的枠組みを踏まえて研究資料を作成し、それを一連の実証研究を実施して検証・修正した適切な研究資料を用いており、そこで得られたデータの分析方法も適切なものである。

(4) 研究の考察と結論が妥当であり、学術的な水準に達しているか

得られた結果に対して、理論的基盤および研究目的、研究仮説、リサーチ・クエスチョンに対応した適切な考察がなされている。また、得られた結論は妥当なものである。さらに、本論文における成果は、*AJELC Journal* (Vol. 3), 『外国語教育研究』 (No. 16), 『日本の言語教育を問い直す—8つの異論をめぐって— (森住衛教授退職記念論集)』に掲載され、国際学会である AILA2014 で口頭発表された。加えて、本論文をとおして得られた結果とその発展的課題において現在、JSPS 科研費 26370640 (基盤研究 (C)) を獲得して研究が行われていることは、本研究の学術的水準が高く評価されていることの証左と言える。

(5) 取得学位にふさわしい意義や成果が認められるか

馬場氏は、日本における英語ライティング指導に関する研究が立ち遅れるなか、これまで研究対象とされることが少なかったスローラーナーを対象とした英語ライティング指導とその評価について一貫して研究を行ってきた。その中で、評価基準の開発のみならず、学習者とのラポールづくりや動機づけにも効果をあげてきた。馬場氏の一連の研究は、英語が得意とはいえ

ない学習者に対する英語教育分野での発展に大きく寄与するものである。

以上のことから、本論文は、本研究科の趣旨に合致するものであり、博士（教育学）の学位を授与するに値する内容を備えたものであることが認められる。